

戦争を批判する文化人は夢想家なのか。

眞鍋由比

「第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。」

と「角川文庫発刊に際して」で角川源義さんは書かれておられます。

オリンピックがあったリオ生まれの小説家パウロ・コエーリョさんの『アルケミスト』の巻末に書かれていた言葉です。この薄い本『アルケミスト』は夢を実現するために羊飼いの少年がアンダルシアからエジプトまで旅をする話。

アルケミストとは錬金術師のことで現代では錬金術がまがいものだということはおかっています。だからこれはファンタジー。人から羊飼いとされるよりパン屋と思われるほうが立派だと思ひパン屋の旦那になって夢を実現しないまま日々を送る男、ジプシーの占い師、自称セイラムの王、メッカに行くことを夢見ながら実現しないまま丘の上でクリスタルを売る商人、詐欺師、そして錬金術師。変わらない毎日がすばらしいものだと気づかない者には夢を実現することはできない。

おそらく少年の夢に出てきた宝物は彼の父の言うとおりに、神学校に行っても見つけることはできただしょう。（最後に見つけた宝物がスペイン征服者の戦利品というのが少々俗っぽい気がします）けれど、何度も全財産をなくし、命がけの冒険で得たいろいろな人（特に運命の恋人ファティマ）との出会いや見事なピラミッドの景色はそれこそ得がたいもの。

この『アルケミスト 夢を旅した少年』は、実は宝物は身近にあったという『青い鳥』的な感じ方も、さまざまな人に出会って人生を考え成長する『星の王子さま』的な考え方もできます。少年は出逢った人にはとても誠実に対応しています。自分の意見は最後まで曲げないけれど。そういったところが著者のコエーリョさんの性格を反映しているのではないかと思います。

コエーリョさんは1996年に貧困に苦しむブラジル人に自らの印税収入で経済的援助を行うパウロ・コエーリョ・インスティテュートを設立するなど、作家活動以外にも精力的に取り組んでいます。99年世界経済フォーラム・クリスタル・アワード、01年ドイツ・バンビ賞文化賞など、世界各国で数多くの賞を受賞しているほか、2000年にはフランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を贈られています。

2003年3月「ありがとう、トルコの国民と議会が、たとえ260億ドル出しても買収できないことを全世界に見せてくれて」と、アメリカのイラク攻撃を痛烈に批判したメッセージ『ありがとう、ブッシュ大統領』を各国の主要メディアに寄稿し、注目を集めました。

ブラジルの作家さんにこんなに骨のある人がいるんですね。

リオ・オリンピックの閉会式するとき、次の東京オリンピックの紹介に使われた曲「望遠鏡の外の景色」はオリンピックの熱狂がやがて戦争に突入したという皮肉な物語で使われた曲らしいです。どうか、日本が戦争に巻き込まれませんように。そしてできるだけ世界から戦争がなくなりますように。日本の文化は、いや日本人は戦争を止められますように。